

杏雨書屋蔵『梅花無尽蔵』について

― 現存する最古の七巻本 ―

中尾 健一郎

万里集九の詩文集『梅花無尽蔵』は、七巻本の成立時期を万里の在世中に求めるのが一般的であろう。筆者は以前、国立歴史民俗博物館に収蔵されている『梅花無尽蔵摘要』二種のうち、「光源院」の里方印を捺すもの（以下、「光源院本」と略記）について論じた際、現行の東京大学史料編纂所が蔵する七巻八冊本（以下、「東大本」と略記）には巻二から万里の佚詩一首が脱落しており、巻尾に附されている詩の総数と巻二に収録されている詩の実数が食い違うことから、現行の七巻本は万里のオリジナルの『梅花無尽蔵』を直接継承するものではなく、後人が『梅花無尽蔵』七巻に手を加え、万里の詩一首を削除した可能性を指摘した。また併せて、東大本巻一の巻尾に記された詩の総数は、万里の詩の実数より一首少ないが、「南畝文庫」の朱方印が捺されたもう一つの『梅花無尽蔵摘要』（以下、「南畝旧蔵本」と略記）では、巻尾に記された詩の総数と万里の詩の実数が一致することを傍証とした¹⁾。だが、光源院本も南畝旧蔵本も零本であり、かつ万里のオリジナルの『梅花無尽蔵』は存在が確認できないため、筆者の指摘は仮説にとどまる。

ところで、万里のオリジナルの『梅花無尽蔵』の存在は明らかにできないにしても、閲覧が可能な七巻本²⁾が成立した時期はどこまで遡ることができるのだろうか。筆者は以前、おおよその成立時期を知ることができる七巻本の『梅花無尽蔵』のうち、もっとも早いものは、天明二年（一七八二）の成立が確認できる名古屋市蓬左文庫所蔵の七巻本であることを論じた³⁾。しかし拙稿を発表した後、これに先んずる善本がほかにあることを知った。それは武田科学振興財団杏雨書屋が所有する『梅花無尽蔵』七巻（以下、「杏雨本」と略記）である。しかもこれは現存する七巻本のうち、もっとも古い由緒をもち、遅くとも明暦元年（一六五五）には成立している。これまで書誌は存在していたのだが、『補訂版 国書総目録』第六卷（とーひ、岩波書店、一九九〇年、五五七頁）

や玉村竹二「万里集九集解題」⁴⁾から完全に抜け落ちていたために、『梅花無尽蔵』の研究において誰もその存在に気づかなかったのである。

本稿では、この貴重な写本の書誌、旧蔵者、本文の正確さ、現行の七巻本の系統における地位について卑見を述べることとする。なお『梅花無尽蔵』所収作品については、特に断らない場合は東大本を底本とし、基本的に通行の字体を使用する⁵⁾。また作品題目には、巻数と市木武雄『梅花無尽蔵注釈』の作品番号を附す。

一 杏雨本の書誌について

杏雨本は、武田科学振興財団の有に帰する以前、内藤湖南（一八六六―一九三四）の蔵書であった。大阪府立図書館編纂『恭仁山莊善本書影』（小林忠治郎発行、一九三五年）において、その書誌は次のように記される。

八四 梅花無盡蔵 釋萬里著 七巻 六冊

古鈔本

淺草文庫ノ印記アリ

圖版 卷一卷首 原寸

この旧版の目録において『梅花無尽蔵』は「七巻六冊」と記されているが、現在は丹色の表紙で装丁した三冊本となっている。つまりどこかの段階で綴じなおされているということである⁷⁾。この点に留意し、杏雨書屋が新たに編纂した『新修恭仁山莊善本書影』（財団法人武田科学振興財団発行、一九八五年）に収められる「恭仁山莊善本解説」（以下、「解説」と略記）八七頁から、杏雨本の解説を挙げよう。なお、目録上の番号は、「八四」から「八五」に変更されている。

八五 梅花無盡蔵 七巻 釋瑞九撰 三冊

舊鈔本。本書ハ釋瑞九ノ詩文集ナリ。瑞九ハ室町初期ノ學僧ニシテ梅庵、萬里、漆桶居士等ノ號アリ、梅花無盡蔵モ亦著者ノ別號ナリ。美濃紙ヲ

用ヒ界線ナク、第一冊ハ每半葉十行、第二三冊ハ十三行ニ書セリ。七卷ヲ三冊ニ装釘ス。卷一至三八七言絶句、卷四八頌、卷五八頌並雜體詩、卷六、七八雜文ヲ輯録シタリ。

書寫ニ關シテハ奥書等ヲ闕ケルモ、室町時代中葉頃ノ五山、緇徒ノ手抄ニ係ルモノト思ハレ、第一冊(一部別筆アリ)ト第二三冊トハソノ筆者ヲ異ニス。全卷ニ朱點及ビ墨書ノ返點、送假名ヲ附セリ。每卷「淺草文庫」(マ)「岡本家藏書印」「家在木國和歌吹上之浦」ノ印記アリ。五山時代ノ丹表紙ヲ附セル原裝本ニテ、大サ七寸七分、横五寸九分。箱入。蓋ノ内面ニ「舊鈔本梅花無盡藏三本 壬寅九月仲壹 炳卿」ノ墨書アリ(今箱失)。參考トシテ萬里自筆ノ七絶二句ヲ書セル紙片ヲ添付ス。本書ハ「續群書類聚」(マ)文筆部ニ收ム。

右の解説を執筆したのは、『新修恭仁山莊善本書影』刊行時の杏雨書屋館長・羽田明氏の序によれば、山鹿誠之助氏である。同氏の「解説」に見える印記等について補足すると、印記の「淺草文庫」は明治時代に設置された官立の「淺草文庫」の蔵書印ではなく、板坂卜齋(後述)の「淺草文庫」の蔵書印である。「岡本家藏書印」は、岡本況齋の蔵書印と見られる。「家在木國和歌吹上之浦」の蔵書印主は未詳¹¹⁾。かつては有った収納用の箱の蓋に書されていた「壬寅」は明治三五年、「炳卿」とは、杏雨本の旧蔵者である内藤湖南の別号。「解説」には自明のことゆえにふれられていないが、杏雨本第一冊の第一葉表には、湖南の蔵書印「炳卿珍藏舊槧古鈔之記」が捺されている。筆者が杏雨書屋にて行った調査結果をもって「解説」を補えば、左記のようである。

【書型】 大本 縦二三・二種、横一八・九種

【体裁】 第一冊、每半葉一〇行、行二〇(二)一字

第二冊、每半葉一三行、行二二

第三冊、每半葉一三行、行二四(二)九字

【表紙】 丹表紙、紋様・無地、右肩に打付墨書「几組」

右肩の下に打付墨書「共三」

【外題】 左肩に題僉打付墨書「梅花無尽蔵」

【内題】 「梅花無尽蔵」

二

【丁数】 第一冊九八丁、第二冊一〇四丁、第三冊九三丁

【その他】 読み仮名は多い。朱点、朱傍引はあるが校語は全て墨書。複教見られる脱字の箇所が東大本と異なる。また、「読浴仏功德経」(卷一・261)と「新居築山」(卷一・262)の順番が、通行本と異なり、入れかわっている。

なお、「解説」の末尾に、「本書」は続群書類従の文筆部に収めるとあるが、杏雨本は後節に論ずるように、東大本に近い系統に属する。

二 杏雨本の旧蔵者・板坂如春(二代卜齋)について

杏雨本の旧蔵者として最初に認められるのは、徳川家に仕えた医師・板坂如春(一五七八―一六五五)である。父親は卜齋と号し、これを襲ったゆえに二代卜齋として知られる。本稿では論述の都合により如春と呼ぶことにしよう。この人物がどのような経緯により『梅花無尽蔵』を入手したかは定かでないが、父親である初代卜齋と如春に関する事蹟を見ると、若干の手がかりとなる事柄がある。如春については、江戸幕府の御儒者を務めた林鳳岡(一六四四―一七三三)が著した「板坂卜齋如春叟碑銘」に詳しい。長文であるので一部を抜粋し、その家系と生い立ち、徳川家との関係を中心に紹介する。なお、原文は漢文であるが、紙幅の都合により書き下し文のみを掲げる。また、傍線は私に施したものである。

老医板坂卜齋如春叟は、衛生家の良なり。其の先宗頓、其の次宗徳、江州坂本に住む。宗徳の子、維順と曰い、洛陽(京都)に遷り、鴻術の業、都鄙に達し、法印位に叙せらる。後に越中国に到り、兵革に罹りて没す。其の子、備後入道と曰う。其の子宗慶、祖の武を繩ぎ、声譽世に聞こゆ。法印位に叙せられ、僥倖軒と号す。曾て武田信玄の招きに応じ、洛より甲陽(甲府)に赴き、眷遇太だ渥し。東照大神君も亦た其の名を聞き、書を賜い葉を饋らるるに謝す。靈陽院義昭及び北条氏政、能く其の技を知る。宗慶に子有り、宗商と曰う。幼くして伶俐なれば、僧と為り、南禅寺東禅院に住す。信玄の言に依り、甲陽に往き、還俗して医と為り、卜齋と号す。

天正小田原の役、神君に従う。其の後、宅地を賜りて江府（江戸）に居り、頗る恩顧に預かる。

叟は、其の子なり。天正戊寅、甲州に生まる。母は関口常菴の女なり。幼名は長太郎、如春と号し、別に東赤と称す。後に父の称を追いて、又た卜齋と号す。幼くして父を喪い、然して悉く家伝の秘方を受く。天正辛卯、十四歳にして大神君を押し奉りて、台徳院大相国公に近仕す。神君、其の孤立を憐れみ、官医意安宗恂（吉田宗恂）、施薬院一鷗に命じ、学習の事に勧誘し、行旅及び放鷹の遊び有るごとに、扈從せざるは無きなり。慶長庚子、関原の役、亦た其の軍に従う。神君、国家を台徳公に譲りて後、駿府に在り。叟、日夜陪侍し、勤勞少なからず。或いは伴食に列し、或いは湯薬を献じ、其の秘薬を調し、其の薬種を異域に求むるに、叟、之れに預からざる無し。其の後、命に依り紀陽の亜相頼宣卿に仕う。寛永庚午、亜相の旨に応じ、令嗣光貞卿に従い東来す。此れより江府に住居し、黄門の病有るごとに、其の危急を療し、皆な良効を得るなり。（中略）晩年、浅草に閑居し、養老養生し、薬を種え、自ら以て楽しみを為す。多く医籍を蔵し、思いを家業に覃む。明暦乙未の冬、病に臥し、自ら其の死の近きに在るを知り、出でて紀陽の亜相、黄門及び少将頼純に謁して告別す。三君も亦た自ら往きて病を問ひ、且つ黄金、時服を賜ひ、音問絶えず。仲冬十二日、遂に没す。寿七十八なり。

（林鳳岡「板坂卜齋如春叟碑銘」、『鳳岡林先生全集』巻百十三）¹²

浅草文庫を設けた二代目板坂卜齋は、代々医師の家系に生まれた。板坂家の初代宗頼、二代宗徳は近江国坂本に居住したが、三代目の維順のときに京都に移り住んだ。維順は医業を修め、その優れた医術によって、京都はもとより地方にも高名を知られるようになり、法印位を授けられたが越中国で兵乱に遭って没した。四代備後入道を経て、五代宗慶の代に再び医術によって知られるようになった。宗慶も祖父に同じく法印位を授けられ、武田信玄の招聘をうけて甲斐国に赴いた。信玄のほか、徳川家康、足利義昭、北条氏政にもその名を知られた人物であった。この宗慶の後を継いだのが六代宗商（初代卜齋）である。初代卜齋について特筆すべきことは、父の後を直接襲ったのではなく、その伶俐さゆえにはじめは南禅寺東禅院に入り、武田信玄の招きに応じて還俗した

という異色の経歴である。彼が何時頃まで南禅寺にいたかは不明だが、武田信玄が家督を継いだのが天文十年（一五四一）、死去したのが天正元年（一五七三）であるから、遅くとも天正年間より前までは僧籍にあったと見られる。初代卜齋は天正六年（一五七八）、甲斐の関口常菴の娘との間に如春をもうけ、天正十八年（一五九〇）の小田原征伐の際にも家康に随行していることから、武田家が滅亡した後、徳川家に仕えたと見られる。卒年は未詳であるが、子の如春が若くして父を喪い、天正十九年（一五九一）十四歳で徳川家康に拝謁し、子の秀忠の近習に取り立てられたとあることから、初代卜齋が死去したのはこの頃かもしれない。祖父宗慶、父卜齋という名医の家系を持つ如春に目をかけた家康は、医師吉田宗恂らに命じて如春に医業を学ばせただけでなく、旅行や鷹狩りに相伴させ、関ヶ原の戦いの際も従軍させた。家督を秀忠に譲り、駿府城に引退するときも如春を引き連れ、朝夕の食事に同席させ、漢方薬の調合などに従事させた。このようなことから、家康が如春を深く信頼していたことがわかる。その後、家康の命により、如春は紀伊藩の徳川頼宣に仕えた。また頼宣の長子光貞に従って江戸へ上り、晩年を浅草の自邸で送った。「浅草文庫」の蔵書印は、如春隠棲の地に因むであろう。明暦元年（一六五五）十一月十二日に死去。

以上、板坂如春について概観したが、彼が杏雨本を浅草文庫に所蔵したことに鑑みれば、杏雨本の成立は、遅くとも明暦元年（一六五五）であり、天明二年（一七八二）に成立した蓬左本に先んずる。つまり現存する最古の七巻本といえる。山鹿誠之助氏の「解説」に一部従えば、室町時代の後半に五山僧によって書き写されたものかもしれない。

ところで、如春はどのようにして『梅花無尺蔵』を入手したのだろうか。鳳岡が著した墓誌銘を読むと、「幼くして父を喪い、然して悉く家伝の秘方を受く」とあり、如春は初代卜齋の蔵書を引き継いだことがわかる。板坂家が京都五山と明らかに接点を持つのは初代卜齋の時である。卜齋がかつて南禅寺に身を置いたという経歴は、同じく南禅寺金地院の住持であり、家康に仕えた以心崇伝が『梅花無尺蔵』を所蔵していたことをも同時に思い起こさせる¹³。還俗前であったか、還俗後であったかは不明だが、初代卜齋のみが京都五山とながりを持つ。したがって、杏雨本は初代卜齋によって板坂家にもたらされた可能性がある。結局のところ、如春が『梅花無尺蔵』を所有したこと以外は確

実ではないのだが、板坂家が『梅花無尺蔵』を入手した経緯としては、初代卜齋が京都五山の関係者を介して入手したとの仮説は成立するであろう。

なお、杏雨本には「淺艸文庫」の蔵書印のほかに、「家在木國和歌吹上之浦」（家は木の国和歌吹上の浦）がある。前述したように、蔵書印主は未詳であるが、印文の内容から、如春が仕えた紀州徳川家の関係者ではないかと考えられる。そうであれば、板坂家の淺草文庫から離れた『梅花無尺蔵』は、紀州藩関係者の手を経て、岡本況齋、内藤湖南の蔵書となった後、杏雨書屋の有に帰したと見られる。

三 杏雨本を用いた本文の校勘——巻七所収作品を中心に

筆者は前稿において、蓬左本の本文が東大本よりも優れている根拠として、「屏風貼画賛十一首・紅葉」（蓬左本、卷三上・210）を挙げた。簡単に説明すると、東大本ならびに諸本では該詩の題と本文に「紅葉」の語を用いており、詩の本文に用いられている「春魂」と内容がかみ合わないが、蓬左本では「紅葉」ではなく「紅葉」（紅葉のこと）に作っており、内容的にもこちらが正しいということである¹⁴。杏雨本を調べると、こちらも「紅葉」の語を用いている。前述のように杏雨本は天明二年（一七八二）に成立した蓬左本よりもさらに古いため、この点から見ても「紅葉」が正しいことが確認できる。だが、元の装丁では七卷六冊本であった杏雨本と、同じく七卷六冊本である蓬左本の全体的な内容が同じかと言えばそうではない。

杏雨本は第七卷所収の全作品が収録されていることから、「困碁軸賛詩序」（卷七・9）の「須臾風雨」までしか収めておらず、「晦冥、不知所存也」以下が脱落している松ヶ岡本や蓬左本、および東大四冊本とは異なる系統に属する。卷四所収の「春岳崇公記室聯句和並序」についても、松ヶ岡本・蓬左本・東大四冊本には「蚊有雷霆怒」以下三句分の脱落が見えるのに対して、東大本・鶯軒本・榊原本・早稲田大学図書館蔵本（以下、「早大本」と略記）と同じく脱落がない。

したがって、杏雨本は東大本と近い系統に属するとみてよいが、この系統の諸本と際だって異なる点がある。それは、東大本・鶯軒本・榊原本・早大本に共通する「読円悟禪師梅花詩」（卷四・52）の題と本文の間に、錯簡によって

四

九首の詩が挿入されるという装丁上の誤りが見られないということである¹⁵。また、東大本の少ない箇所において見られる脱字や誤字を、杏雨本によって補訂できる点も注目に値する。以下、脱字の補完、誤字の訂正、杏雨本の誤字を手がかりとした通行本の誤字の訂正の三点について確認しよう。なお、論述上の都合および紙幅の都合により、松ヶ岡本と蓬左本、東大四冊本および早大本、続群書類従活字本では脱落している「困碁軸賛詩序」（卷七・9）から後の作品のみを本文異同の調査の対象とする。

（一）杏雨本を用いての現行本の脱字の補完

「臨川菴記」（卷七・36）、「恵日大慈派下三公笑雲侍史号説」（卷七・37）にはそれぞれ欠字があり、杏雨本のみが字が欠けていない。左に示せば次のようである（以下、標題は東大本による）。

○卷七・36「臨川菴記」

東大本 黄河九曲水落字アラシ○於崑崙
鶯軒本 黄河九曲水落字アラシ○於崑崙
榊原本 黄河九曲水落字アラシ○於崑崙
杏雨本 黄河九曲水出於崑崙

○卷七・37「恵日大慈派下三公笑雲侍史号説」

東大本 而色微笑之来由也
鶯軒本 而色微笑之来由也
榊原本 而色微笑之来由也
杏雨本 而金色微笑之来由也

「恵日大慈派下三公笑雲侍史号説」（卷七・37）は、笑雲清三のために万里が道号の由来について著した文章である。これには「金」字が脱落しており、脱落箇所の前の本文に笑雲のことを「金色之新進士」と呼んでいることから、「金」字を補い、「而して金色微笑の来由や」と読むべきであることは推定できる。

玉村竹二氏は、『五山文学新集』第六卷所収『梅花無尺蔵』卷七の「恵日大

慈派下三公笑雲侍史号説」の本文に「[金]」を傍書している¹⁶。ただし、そのように記したテキストがあるわけではないため、推定にとどまっていた。杏雨本の本文と対照させることによって、氏の推定が裏付けられたことになる。

このように文脈から脱字を推定できる場合がある一方で、推定ができなかったのが、「臨川菴記」(巻七・36)である。東大本と榊原本には朱書きで「落字アラン」と傍書されており、鶺軒本にも墨書きで同様の注記が見える。東大本以下、本文の校訂にたずさわった人物たちは、一字分が脱落していることには気づいたが、いずれの字を補えばよいのか分からなかった。だが、杏雨本に「黄河九曲水出於崑崙」(黄河九曲、水は崑崙より出づ)とあることから、脱落した字が「出」であったことがわかる。

脱字のほかに、東大本系諸本の本文に衍字と思われるものがあることも、杏雨本は気づかせてくれる。一例を挙げれば、東大本系諸本の「美江寺本堂上葺化縁疏」(巻七・18)に、「彼無畏三藏者、甘露飯王之後裔。越流沙葱嶺、凌龍地虎狼之毒牙、之入長安城」(彼の無畏三藏なる者は、甘露飯王の後裔なり。流沙葱嶺を越え、龍地虎狼の毒牙を凌ぎ、之きて長安城に入る)の五句があり、動詞が重複するために「之入長安城」の「之」字が必要なのかが判然としない。玉村竹二氏は、この「之」字の下に「△」^(脱アルカ)と一字分を挿入し、脱字の存在を疑っている¹⁷。一方、杏雨本では「凌」字以下を、「凌龍地虎狼之毒牙、入長安城」(龍地虎狼の毒牙を凌ぎ、長安城に入る)に作り、文意が通じやすい。もちろん「之」字が有っても読めなくはないが不自然である。したがって、伝写される間に、衍字の「之」が誤って書き足されたのであり、本来は杏雨本のように作られていたと考えられる。

(二) 杏雨本を用いての現行本の誤字の訂正

(イ) 標題の訂正

杏雨本の長所は、現行の東大本等の脱字を補完できることのほかに、誤字を訂正できる点からも見いだすことができる。もつとも顕著に見られるのは作品の標題においてである。東大本の「葦牧野説」(巻七・12)と「東陽大禪師作前長州刺史三秀端公之贊、某跋某末」(巻七・39)、「前任禪興竺帝和尚祭文」(巻七・43)の例を見よう。

○巻七・12 「葦牧野説」

東大本 「葦牧野説」
鶺軒本 「葦牧野説」
榊原本 「葦牧野説」
杏雨本 「葦牧軒説」

○巻七・39 「東陽大禪師作前長州刺史三秀端公之贊、某跋某末」

東大本 「東陽大禪師作前長州刺史三秀端公之贊、某跋某末」
鶺軒本 「東陽大禪師作前長州刺史三秀端公之贊、某跋某末」
榊原本 「東陽大禪師作前長州刺史三秀端公之贊、某跋某末」
杏雨本 「東陽大禪師作前長州刺史三秀端公之贊、某跋其末」

○巻七・43 「前任禪興竺帝和尚祭文」

東大本 「前任禪興竺帝和尚祭文」
鶺軒本 「前任禪興竺帝和尚祭文」
榊原本 「前任禪興竺帝和尚祭文」
杏雨本 「前任禪興竺華和尚祭文」

まず「葦牧野説」(巻七・12)については、零本である光源院本のみが「葦牧軒説」に作っており、東大本系諸本ではすべて「葦牧野説」の標題を用いている。この作品は、京都の東福寺の僧景雪からの求めに応じて、その書斎の斎号の由来を説く文である。本文を見ると、「行色邊在于近、投烏糸蘭一片、需扁其軒。(中略)謹擲葦牧二字於大雅之中」(行色、邊かに近きに在り、烏糸欄一片を投じ、其の軒に扁せんことを需む。(中略)謹みて「葦牧」の二字を「大雅」の中より擲づ)とある。景雪が京都に赴く前に、万里に烏糸欄紙(黒い野線を引いた紙)を与え、書斎の扁額に題する斎号とその説を求めたので、「詩経」大雅より「葦牧」の二字を選んだということだが、「其の軒に扁せんことを需」められて「葦牧」の斎号を説いたのであれば、景雪の書斎の名は「葦牧軒」であり、万里が作った文章の標題は「葦牧軒説」であつたはずである。七巻本のうち杏雨本のみが「葦牧軒説」に作るのは、文意から見ても正しい。光源院本も傍証となるであろう。したがって現行本の標題は、杏雨本にし

たがって改められなければならない。

次に「東陽大禪師作前長州刺史三秀端公之贊、某跋某末」（巻七・39）の標題の誤りについてである。標題末の四字は鶯軒本の注記にしたがって読めば、「某、其の末に跋す」となるが、これまで二文字目の「某」字を「其字」に作ったテキストは知られていなかった。しかし杏雨本では、まさに「某跋其末」に作っており、某（万里本人）が東陽大禪師の贊の末尾に跋を附したことがわかる表記となっている。鶯軒本の注記が正しいことが杏雨本によって裏付けられるのである。

最後の「前任禪興竺帝和尚祭文」（巻七・43）については、その題に東大系諸本では「華力」もしくは「華乎」の注記が見えており、杏雨本ではまぎれもなく「華」字が用いられている。したがって、この作品の題は「前任禪興竺華和尚祭文」であり、「竺華和尚」のために作られた祭文であることがわかる。

（ロ）本文の訂正

杏雨本によって誤字を訂正できるのは、標題のみでなく、本文も同様である。以下、「濃州路郡上郡下田郷吉田村臨濟山大宝禪寺僧堂前鐘銘並序」（巻七・15）、「牧野薬師寺仏殿再興化縁疏」（巻七・33）の二つの散文と、前出の「前任禪興竺華和尚祭文」（巻七・43）の韻文に見られる誤字が、杏雨本によって訂正が可能であることを個別に例示する。

○巻七・15 「濃州路郡上郡下田郷吉田村臨濟山大宝禪寺僧堂前鐘銘並序」

東大本

・ 故使型工鑄堂前之鐘

・ 同超等妙之以覺

鶯軒本

・ 于圓閑靜

・ 故使型工鑄堂前之鐘

榊原本

・ 同超等妙之以覺

・ 于闐閑靜

杏雨本

・ 故使型工鑄堂前之鐘

・ 同超等妙之二覺

・ 于闐閑靜

六

「濃州路郡上郡下田郷吉田村臨濟山大宝禪寺僧堂前鐘銘並序」（巻七・15）には、三箇所顕著な異同がある。まず「故使型工鑄堂前之鐘」について見よう。この箇所では、「型」字の判読ができない。傍書に見える「塑乎」と記す校語を用いて読めば、「故に便ち塑工、堂前の鐘を鑄る」となる。「塑工」とは土を捏ねて塑像などを製造する職人のことである。鐘を鑄造する際には、まず鑄型を作らなければならない。鑄型を作る際に砂や粘土を使用したことから、東大本の校訂者は鑄型を作る職人である「塑工」の誤りではないかと疑ったのかもしれない。ただ「塑工」では東大本における「型」とは形状がかなり異なるため、当を失っているであろう。

一方、杏雨本では「便」字を「使」字に作り、「型」字を「型」字に作る。杏雨本にしたがえば、ここは「故使型工鑄堂前之鐘」（故に型工をして堂前の鐘を鑄しむ）と読む。「型工」は見慣れない語であるが、鐘を鑄造する鑄物師を指すと考えられる。鐘を鑄造する際には、まず鑄型を作らなければならないが、その作業を行うのが鑄物師である。少なくとも文字の形状や、鐘を鑄造させたという文脈に鑑みれば、万里の原文は杏雨本のとおりであったはずである。次に東大本の「同超等妙之以覺」であるが、これは東大本系諸本の校語にもあるように、「以」ではなく「二」を採用し、「同に等妙の二覺を超えて」と訓じて、「時を同じくし等覺と妙覺の二つの悟りの境地を超越して」と解すべきである。杏雨本では「以覺」を正しく「二覺」に作っているため、こちらが正しいことは明らかである。

なお、銘の本文にも異同がある。東大本の「于圓閑靜」であるが、鶯軒本・榊原本では「于闐閑靜」、杏雨本では「于闐閑靜」に作る。これと対句を構成する「豊嶺黄昏」が、地名と見られる「豊嶺」と時間帯を表す「黄昏」の二字の熟語をつなげた形になっていることから、地名である「于闐」（現在の中国新疆ウイグル自治区のホータン）と静けさを意味する「閑靜」をつなげて表記する杏雨本が正しいことがわかる。

○卷七・33「牧野薬師寺仏殿再興化縁疏」

東大本

・挿一莖草作林月刹

・相共致螻蟻之悦

鵜軒本

・挿一莖草作林月刹

・相共致螻蟻之悦

榊原本

・挿一莖草作林月刹

・相共致螻蟻之悦

杏雨本

・挿一莖草作梵刹

・相共致螻蟻之悦^{マコトヲ}

・欽敲^チ諸州之檀門

「牧野薬師寺仏殿再興化縁疏」(卷七・33)は、美濃国鷺沼にあった薬師寺の仏殿を再興するための寄付を募る文章である。これにも主に三箇所の顕著な異同がある。まず、東大本の「挿一莖草作林月刹」であるが、杏雨本の本文を見れば「林月刹」は寺院を表す「梵刹」の誤りであり、ここは「挿一莖草作梵刹」(一莖草を挿して梵刹を作る)と読むべきである。附言すれば、妙心寺龍華院所有の古鈔本『梅花無尽蔵』(以下、「妙心寺本」²⁰)と略記)が「梵刹」に作ることも、杏雨本の確かさの傍証となる。

次に東大本の「相共致螻蟻之悦」は、「相い共に螻蟻の悦びを致す」と訓ずる。「螻蟻」はケラとアリのことであり、ここでは微賤な民草のたとえである。そのまま解釈すると、民衆が薬師寺に「悦び」を寄せた、つまり喜捨したという意味になるだろうか。意味は通らなくはないが若干不自然である。一方、杏雨本と妙心寺本を確認すると、「悦」字を「忧」字に作っている。杏雨本には「マコトヲ」の傍書があるため、ここでは「相い共に螻蟻の忧を致す」と読み、民衆が真心をこめた財物を薬師寺に寄せたという意味になる。東大本の「悦」字は誤っているとまでは言えないが、ここでは、東大本より由来が古い杏雨本および室町末期の写本と見られる妙心寺本の本文にしたがうべきであろう。

東大本の「欽敲諸州之檀門」については、「欽みて諸州の檀門に馭し」と

読めば、薬師寺の僧徒が馬で檀家の門戸に駆けつけて浄財を求めたことになる。ただしこの文章の末尾に附された銘文をみれば、「窺便宜而敲諸州」(便宜を窺いて諸州を敲き)とある。単に僧徒が檀家の門戸を叩いて浄財を求めたということになり、散文と銘文とで内容に齟齬が生ずる。杏雨本を見ると、「欽敲諸州之檀門」(欽みて諸州の檀門を敲きて)となっているため、東大本系の諸本が採用する「馭」字は「敲」字の誤りであることが分かる。念のために妙心寺本も確認すると、こちらは「故敲諸州之檀門」(故に諸州の檀門を敲きて)とある。「欽」字ではなく「故」字を採用しているのは、万里が推敲したことによって生じた異同であろう。「敲」字に関しては、杏雨本の優位は動かない。

○卷七・43「前住禅興竺華和尚祭文」

東大本 陀羅尼雨、花飛湿中

鵜軒本 陀羅尼雨、花飛湿中

榊原本 陀羅尼雨、花飛湿中

杏雨本 陀羅尼雨、花飛湿巾

前出の「前住禅興竺華和尚祭文」(卷七・43)の弔詞本文も、杏雨本によって誤字の訂正が可能である。東大本系諸本の「陀羅尼雨、花飛湿中」二句であるが、杏雨本は後句を「花飛湿巾」に作る。この弔詞は四言詩の体裁の韻文であり、「春」「因」「信」「辛」「身」「旬」「辰」「暎」「真」「巾」(東大本系では「中」「人」「陳」が韻字として配置されているため、杏雨本が正しく、意味もこちらの方が通じる²¹)。

(三) 杏雨本における誤写

東大本系統の誤字を訂正し得る杏雨本であるが、東大本系と同じく誤って写される例もいくつか見られる。特に顕著なのは、「寓」字を「寫」字に誤る例である。参考までに杏雨本に書き下し文も添えて掲出する。

○卷七・12「葦牧軒説」

暫寓^寓鷺沼之小积菴

暫く鷺沼(鷺沼)の小积菴に寓す

○卷七・13「淥説」

寫居累世

寓居して世を累ぬ

二例ともに身を寄せることを意味する文脈で用いられている。「葦牧軒説」は見せ消ちで修正するように「寓」字が正しく、「写」の正字体である「寫」は誤りである。「淥説」には校語もなく、誤ったままである。

ところで、杏雨本の誤字には、万里の本文における本来の意味を知るための重要な手がかりとなるものがある。それは前出「臨川菴記」（卷七・36）の次の一文である。参考までに書き下し文を併記する。

当此時、而木之大者、材之巨者、縦横水上、紛於王某造舟之柿、彷彿漢武自潯陽浮、親射蛟龍於江中、軸轡千里之含尾。

此の時に当たりて、木の大きいなるもの、材の巨いなるもの、水上に縦横して、王某の造舟の柿に紛れ、漢武の潯陽より浮かび、親ら蛟龍を江中に射て、軸轡千里の尾を含むを彷彿す。

これは、美濃国鷓沼（現在の岐阜県各務原市）に草庵・梅花無尺蔵を構えた万里が、春の雪解け水を利用して、木樵たちが材木で筏を組み、川の下流に運ぶ様子を描写した部分である。「彷彿」以下は『漢書』卷六、武帝紀の元封五年（前一〇六）冬に見える、武帝が南巡して潯陽（現在の江西省九江市）に遊んだ故事を引いている²²。しかし、「紛於王某造舟之柿」は何を指すが不明である²³。東大本、鶚軒本、榊原本はともに「柿」の本字である「柿」に作るため、これらの写本の筆写者も「柿」字と認識していたと見られる。果樹である「柿」は木材となり得る植物ではないので、杏雨本のこの字は誤写の可能性がある。そこで類似する字を調べたところ「柿」字があることに気づいた。これは「枕」の俗字で、「こけら」「木屑」の意味である。「柿」字であれば木材と関わる故事がある。

『晋書』卷四十一、王濬伝を繙くと、西晋の王濬は武帝の命を受け、蜀の地で呉を攻めるための戦艦を作った。そのときに生じた木屑・木片の類が、長江の水面を覆って下流に流れたとある。『晋書』の原文では、「舟楫之盛、自古未

有、濬造船於蜀、其木柿蔽江而下」（舟楫の盛んなること、古より未だ有らず、濬、船を蜀に造り、其の木柿江を蔽いて下る）と記されており、「木柿」が木の切りくず、木片に該当する。つまり「臨川菴記」に使用されている「柿」あるいは「柿」は誤字であり、本来は「枕」の俗字である「柿」が正しい。杏雨本と東大本系の諸本はともに誤っているのだが、杏雨本が「柿」字を用いていたことにより、「王某」が王濬であること、東大本系統の「柿」は「柿」が誤って伝写されたものであることが判明するのである。

四 『梅花無尺蔵』七巻本の伝本系統

杏雨本が現存する七巻本の中で最古であること、その本文が東大本系の諸本よりもすぐれることは前に見たとおりである。筆者はこれまで万里の『梅花無尺蔵』の七巻本と抄録本である古鈔本を中心に研究してきた。主に玉村竹二氏が解題を執筆する際に閲覧し得なかつた諸本のうち、蓬左本、松ヶ岡本、早大本、光源院本、島原松平文庫本等について論考を発表したが、その過程で徐々に分かってきたのは、玉村氏の「万里集九集解題」（『五山文学新集』第六巻所収）ではカバーできないテキストが思いのほか多くあるということである。玉村氏が解題を執筆した時点で、七巻本の主要なものは、東大本、東大四冊本、鶚軒本、榊原本、続群書類従活字本の五種類であった。しかしこれ以外に、筆者が調査した蓬左本、松ヶ岡本、杏雨本、早大本、都立公文書館本の五種類の鈔本があり、七巻本の種類は玉村氏が調査した七巻本に倍することが明らかになった。これらの七巻本諸本の伝本系統を図示すれば、おおむね本稿末の『梅花無尺蔵』七巻本伝本系統図²⁴のようになるであろう。

杏雨本と東大本系諸本は、明治後期の写本で筆写が中断された早大本を除いて、すべて巻七までの全作品を収める。蓬左本・松ヶ岡本は、巻七の途中から作品が失われており、かつ七巻六冊の第六冊が通行本の巻五の内容となっている。つまり近い系統の東大四冊本のように巻一から巻七までが順番に装丁されてはいない。恐らく松ヶ岡本と蓬左本（巻三から巻七まで）は、杏雨本や東大本系諸本とは別の万里の草稿に由来し、東大四冊本は、松ヶ岡本と近い系統の写本を正確に並べ替えたものに基づくであろう²⁴。文字は正確だが作品が揃っていない松ヶ岡本と蓬左本は、七巻本の中では傍流に位置づけられ、江戸時代

に筆写の主流となっていたのは、東大本系の『梅花無尺蔵』であったと考えられる。一方、杏雨本は他の七巻本とは別に命脈を保ち、独立した系統をなしているようである。これと近い零本に南畝旧蔵本があるが、この本と杏雨本との関係については、他日を期したい。

おわりに

本稿によって、杏雨本は成立時期を見ても、本文の正確さを見ても、他の七巻本をさらに凌ぐ善本であることが判明した。従来は、肥前平戸藩主・松浦静山（一七六〇～一八四一）の旧蔵書²⁵であった東大本が重要視されていたが、板坂如春（一五七八～一六五五）旧蔵の杏雨本が、これよりもさらに重要であることは言を俟たない。

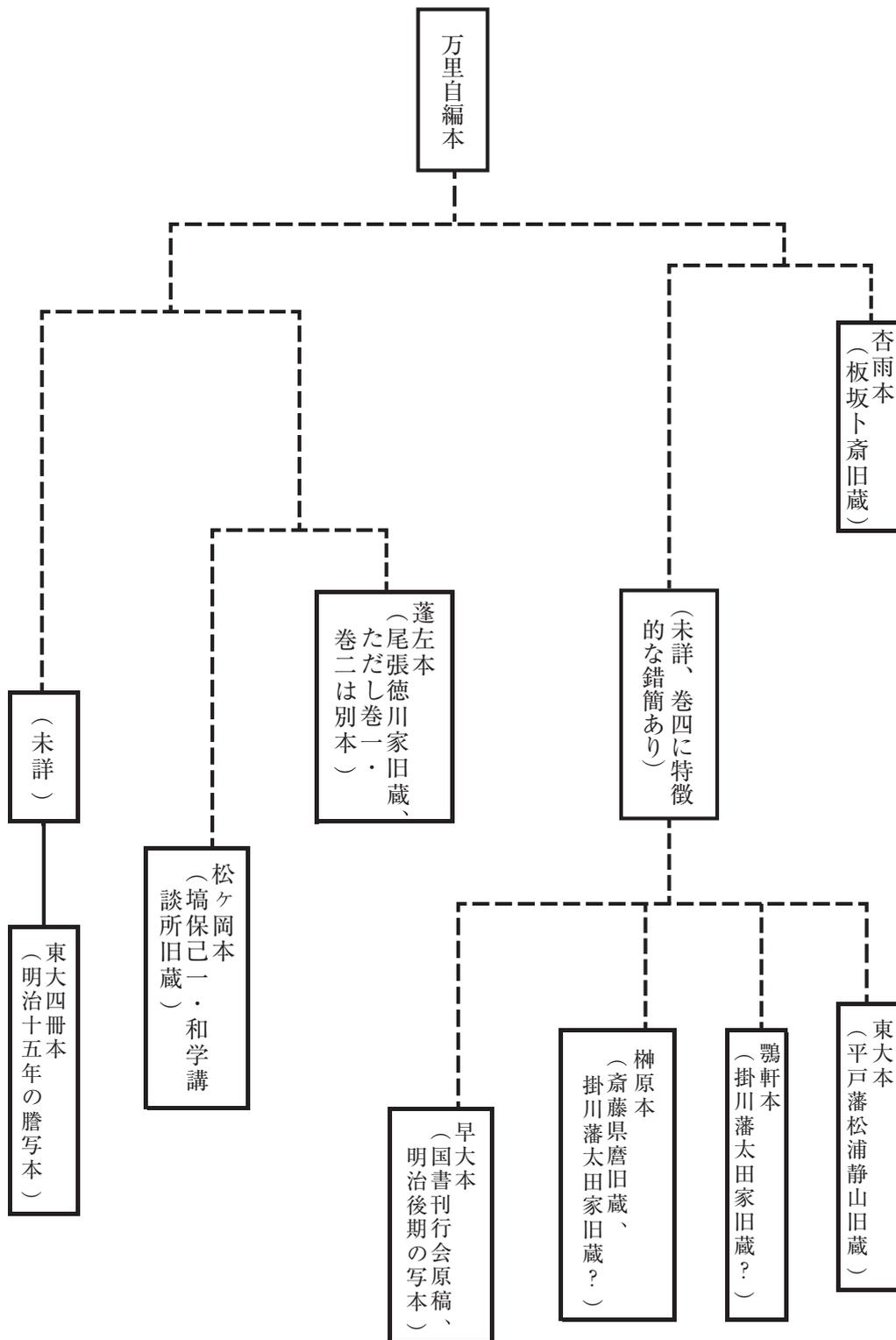
筆者が『梅花無尺蔵』の伝本研究に着手した当初は、七巻本は大家に、古鈔本は禅宗の寺院において伝写されていたのではないかと予想していた。予想は大きくははずれていなかったが²⁶、最古の七巻本である杏雨本に関しては、もともと医師の蔵書であったとは思ってもよらなかった。この貴重な写本が、医学と深く関わる杏雨書屋の有に帰したことは、奇縁と言わざるを得ない。

万里の『梅花無尺蔵』は中世の文芸や歴史について研究する上で、はなはだ貴重な資料である。それにもかかわらず、通行する『五山文学新集』第六巻や続群書類従活字本の内容を仔細に見れば、本文に脱字・誤字があるだけでなく作品の標題さえ誤っていることがある。従来は諸本の傍書や、玉村竹二氏、市木武雄氏の校訂を経ても、文字が正確か、校語が正しいか否かは、正確な本文を持つテキストがなければ判断のしようがなかった。しかし、杏雨本の存在によって従前の問題を解決できることが明らかとなった。以後、『梅花無尺蔵』に基づいて万里の詩文を研究する者、あるいはこれに関連して中世の文芸や歴史を研究する者があれば、必ず杏雨本の本文を確認する必要があることを強調して本稿を締めくくることがしたい。

【附記】今回執筆にあたり、公益財団法人武田科学振興財団杏雨書屋に多大なご協力を賜りましたこと、特に感謝申し上げます。

なお本研究は、JSPS科研費 JP16K02369の助成を受けたものである。

『梅花無尽蔵』七卷本
伝本系統図



※他に東京都公文書館所蔵の七巻四冊本があるが、これは明治四十三年に東大四冊本を謄写した本であるため略す。東大四冊本も同じく略す。なお、破線は直接の継承関係を意味するものではない。

注

1 拙稿「光源院本『梅花無尽蔵』解題」(『国立歴史民俗博物館研究報告』第一九八集、二〇一五年二月)二六四～二六七頁を参照。

2 七巻本の体裁を具える『梅花無尽蔵』諸本には、東大本のほかに、東京大学史料編纂所が蔵する七巻四冊本(以下、「東大四冊本」と略記)、土井鶚軒旧蔵本(国立国会図書館蔵、以下、「鶚軒本」と略記)、榊原芳野旧蔵本(国立国会図書館蔵、以下、「榊原本」と略記)、名古屋市蓬左文庫蔵七巻六冊本(以下、「蓬左本」と略記)、松ヶ岡文庫蔵七巻六冊本(以下、「松ヶ岡本」と略記)等がある。東大本・鶚軒本・榊原本の三種は『梅花無尽蔵』第七巻のすべての作品を収録しており、かつ本文が同じ系統に属する。これらの系統については拙稿「江戸名所図会」における『梅花無尽蔵』(『国語国文研究と教育』第五六号、熊本大学教育学部国文学会、二〇一八年二月)に論じた。

3 拙稿「蓬左文庫蔵『梅花無尽蔵』七巻本について―併せて松ヶ岡本・統群書類従活字本との関係について論ず」(『国語国文研究と教育』第五八号、熊本大学教育学部国文学会、二〇二〇年一月)を参照。なお同論文では、蓬左本の巻三から巻七までの体裁と本文が、松ヶ岡本とはほぼ同じであることから、この二種類の写本が同じ系統であることを論じた。

4 玉村竹二「万里集九集解題」(『五山文学新集』第六卷、東京大学出版会、一九七二年)。

5 東大本および東大四冊本については、東京大学史料編纂所の「所蔵史料目録データベース」を参照した。また、榊原本については、国立国会図書館デジタルコレクションを参照した。

6 市木武雄「梅花無尽蔵注釈」第一巻～第四巻、統群書類従完成会、一九九三～一九九四年。

7 杏雨本の装丁については、二〇一九年二月に杏雨書屋に確認したところ、装丁を改めたことを示す記録は無いとのことである。

8 山鹿誠之助氏については、『新修恭仁山莊善本書影』に羽田明氏の手になる「山鹿誠之助略伝」(x、xvi頁)が収められている。この略伝によれば、山鹿氏は明治一八年生まれ、昭和三年死去。長崎県平戸市の出身で、東京帝国大学文科大学の史学科を明治四二年(一九〇九)に卒業し、明治四五年(一九一〇)に京都帝国大学附属図書館の司書に任官。昭和十三年(一九三八)に依願免官し、以後昭和十九年(一九四四)まで同図書館の嘱託司書の任にあった。以後、嘱託として京都大学附属図書館と杏雨書屋の司書を務め、昭和十四年(一九三九)から昭和十九年(一九四四)の間に「恭仁山莊善本解説」を完成させたのち、平戸に帰郷したとされる(羽田明氏「序」ii頁)。

9 小野則秋『日本の蔵書印』(臨川書店、一九五四年初版、一九七七年複製版発行)、一〇四～一〇五頁を参照。

10 岡本況斎(一七九七～一八七八)、名は保孝。江戸後期から明治初期の国学者。況斎の事跡については、榊原一雄「岡本保孝のこと」「岡本保孝のこと」補遺(ともに『榊原一雄著作集』第十巻、汲古書院、一九九四年)に詳しい。況斎の蔵書印「岡本家蔵書印」については、国文学研究資料館「蔵書印データベース」を参照した。

11 国文学研究資料館「蔵書印データベース」によれば、「家在本國和歌吹上之浦」の蔵書印を捺した書籍には、『和泉式部集』(国文学研究資料館蔵)、『小倉百首類題話』(早稲田大学図書館蔵)などがある。

12 原文は、徳田武編『鳳岡林先生全集』第四冊(勉誠出版、二〇一四年)二二六～二二八頁に拠った。

13 以心崇伝が『梅花無尽蔵』を所有していたことは、安積澹泊の書簡を集めた『新安手簡』に見える。中川徳之助「万里集九」(吉川弘文館、一九九七年)二三五頁および注(2)所掲「江戸名所図会」における『梅花無尽蔵』二九頁を参照されたい。

14 注(3)所掲「蓬左文庫蔵『梅花無尽蔵』七巻本について―併せて松ヶ岡本・統群書類従活字本との関係について論ず」五一～五四頁を参照。

15 注(2)所掲「江戸名所図会」における『梅花無尽蔵』二二一～二三頁を参照。なお、榊原本のほか、東大本・鶚軒本・早大本にも巻四の同じ部分に錯簡が見られることは、拙稿「早稲田大学図書館蔵『梅花無尽蔵』について―国書刊行会原稿を中心に―」(『熊本大学教育学部紀要』第六六号、二〇一七年二月)四一〇頁にて言及した。

16 注(4)所掲、『五山文学新集』第六卷、一〇〇二頁を参照。

17 注(4)所掲、『五山文学新集』第六卷、九八二頁を参照。

18 『詩経』大雅・行葦に、「敦彼行葦，牛羊勿踐履」(敦たる彼の行葦，牛羊踐履する勿れ)とある。

19 梵鐘の鑄造法および後出の鑄物師については、坪井良平『日本の梵鐘』(新装版、吉川弘文館、二〇一九年。初出は角川書店、一九七〇年刊)「VI 梵鐘の鑄造」四三～五二頁、および安福彦七『美濃国多芸郡金屋の鑄物師 中世美濃の梵鐘を独占鑄造』(養老町文化財保護協会、一九八〇年)三～四頁を参考した。万里が居住した美濃国には、梵鐘を鑄造する職能集団があった。

20 妙心寺本については、注(4)所掲、玉村竹二「万里集九集解題」一一八一～一一八六頁、並びに注(1)所掲「光源院本『梅花無尽蔵』解題」二六二～二六三頁を参照されたい。

21 玉村竹二氏は、「中」字に「巾カ」と注記しており、氏の推測が正しいことも杏雨本によって裏付けられる。注(4)所掲『五山文学新集』第六卷、一〇〇四頁を参照。

22 該当する『漢書』の原文は次のとおり。「自尋陽浮江，親射蛟江中，獲之。舳舻千里，薄樅陽而出，作盛唐樅陽之歌」。なお、『漢書』と後掲『晋書』の原文は、中華書局の校点本に基づく。

23 市木武雄氏は、注(6)所掲『梅花無尽蔵注釈』第四冊に、「王某」を「文王」と見なし、「柿」字を「梯」字に読みかえて「舟橋」の意ととり、『詩経』大雅・大明の「造舟為梁」を引く(五五四頁)。しかし、「王某」を「文王」とする解釈にはしたがいがたい。

24 松ヶ岡本、蓬左本、統群書類従活字本の関係については、注(3)所掲「蓬左文庫蔵『梅花無尽蔵』七巻本について―併せて松ヶ岡本・統群書類従活字本との関係について論ず」および拙稿「松ヶ岡文庫蔵『梅花無尽蔵』と勝海舟」(『松ヶ岡文庫研究年報』第三三号、二〇一八年三月)を参照。なお、万里の草稿に由来す

る古鈔本には光源院本のように、巻の配置がはじめから降順になっていないものが存在する。光源院本は、巻四に相当する「第一頌部」「第三雜文二（第二詩部）」の順に作品が配列されている。注（1）所掲「光源院本『梅花無尽蔵』解題」二五七頁を参照されたい。

25 松浦静山の蔵書印「樂齋堂圖書記」については、国立国会図書館編『国立国会図書館蔵書印譜』（青裳堂書店、一九九五年）九九頁を参照。

26 東大本、蓬左本が大名家の所有物であったことは自明であるが、伝本系統が近い鶚軒本と榊原本も、遠州掛川藩太田家に由来すると見られる。鶚軒本には「太田氏圖書」の蔵書印があり、榊原本には太田道灌の号にちなむ「静勝」の蔵書印がある。玉村竹二氏は、注（4）所掲「万里集九集解題」に、鶚軒本を水戸藩に仕えた太田道灌の後裔の所有であったと推測する（一一七三頁）。しかし、鶚軒本を校訂した矢部潤（号は温叟。掛川藩儒・松崎謙堂の門人）は、掛川藩主太田家に仕えた人物である。水戸藩に仕えた太田家ではなく、掛川藩主の太田家が、鶚軒本・榊原本の旧蔵者として適当であろう。なお、矢部温叟については、西尾市岩瀬文庫「デジタルアーカイブシステム」に記載の「道淳公貴号考」書誌の備考に、「旧・掛川藩士」と記されている。岩瀬文庫の書誌のURLは左記のとおり。

<https://irc-adeac.irc.co.jp/WJ1F0/WJ1S07U/2321315100/2321315100100010/mp01645800>